

2023年度

学生による授業評価
よりよい授業を目指して

報 告 書

2024年9月

和洋女子大学

目次

1. はじめに	3
2. 授業評価実施概要	4
3. 評価	5
4. 総括	5
(1) 全学授業評価結果の概要	5
1) 教員の授業設計と運営について	10
2) 出席率の高低群と授業評価について	11
3) 授業形態別による評価	11
(2) 授業の総合満足度からみた今後の課題	13
1) 共通総合科目(全学教育センター)の課題 (全学教育センター長 鬘谷要)	15
2) 日本文学文化学科の専門科目の課題 (学科長 佐藤勝明)	15
3) 心理学科の専門科目の課題 (学科長 池田幸恭)	16
4) こども発達学科の専門科目の課題 (学科長 大神優子)	17
5) 英語コミュニケーション学科の専門科目の課題 (学科長 星野文子)	18
6) 国際学科の専門科目の課題 (学科長 金丸裕志)	18
7) 服飾造形学科の専門科目の課題 (学科長 森本美紀)	19
8) 健康栄養学科の専門科目の課題 (学科長 杉浦令子)	20
9) 家政福祉学科の専門科目の課題 (学科長 丸谷充子)	21
10) 看護学科の専門科目の課題 (学科長 大堀昇)	21
5. 資料	24

1. はじめに

和洋女子大学では内部質保証の主たる対象を教育活動と考え、教育の充実と学習成果の向上を図るために入学者受入方針（以下「アドミッション・ポリシー」）、教育課程・編成実施方針（以下「カリキュラム・ポリシー」）、学位授与方針（以下「ディプロマ・ポリシー」）の3つのポリシーに基づいて具体的な目標を策定し自己点検・評価、改善を進めることを重要視している。また、アドミッション・ポリシー、カリキュラム・ポリシー、ディプロマ・ポリシーの3つのポリシーを評価するために、「入学前・入学直後」、「在学中（単位認定・進級判定）」、「卒業時（卒業後）」の各時期に、「大学（機関）レベル」、「学部・学科（教育課程）レベル」、「授業科目レベル」の3つのレベル（水準）を設定している。この基準を和洋女子大学の教育課程の質を保証するための「アセスメント・ポリシー」として活用している。

授業評価アンケートには、授業内容の理解度の確認、教員の指導力の評価、授業の構成・適切な進捗の評価、学生に対する学びの動機付けやモチベーション向上の取組、学習環境の整備、フィードバックの構築など、多くの評価ポイントが存在するが、いずれも、教員が自らの講義の質を客観的に点検し、改善を目指すためにその役割は大きい。

大学では、COVID-19対策も一段落した。対策時には、遠隔授業の開講があったがその後は、遠隔授業から対面に戻す流れがある。今後は多様な授業形態を生かす取り組みが求められる。本学は社会が求める教育需要に応える教育の質保障に今後も尽力する所存である。末筆ながら、調査にご協力をいただいた学生諸氏と、結果の分析と評価に多大なご尽力をいただいた教職員の皆様に心から感謝の意を申し上げたい。

和洋女子大学 学長
金子健彦

2. 授業評価実施概要

授業評価は、前期開設科目については2023年7月1日(土)～8月31日(木)、後期開設科目及び通年開設科目については2023年12月21日(木)～2024年1月31日(水)の期間中に実施した。なお、各期の前半科目は5～6月と11月に実施した。

2023年度の開設科目は、前期711科目、後期706科目、通年103科目、前期集中28科目、後期集中16科目、通年集中132科目で、合計1,696科目である。このうち授業評価対象科目は、佐倉セミナー科目、学外実習科目、集中科目、大学院科目、同時開講科目、読替科目、受講者数10人以下の科目を除いた合計1,091科目で、全開講科目の64.3%に相当する。ただし、この対象科目のうち後期4科目が未実施となったため、全開講科目のうち授業評価を実施した割合は64.1%である。

評価は、manaba courseの自動アンケート機能を利用したWEB回答方式のアンケートで実施し、各授業科目について評価と自由記述を学生に入力させた。アンケートの設問は巻末「2023年度授業評価アンケート設問」とおりである。主に教授方法・スキルに関する評価、授業準則・秩序に関する評価、知的刺激や理解度関連達成度に関する評価、主体的学修に関する評価、教員の熱意に関する評価、総合的満足度、学生自身の授業への参加度に関する自己評価、学びの目標(ディプロマ・ポリシー)における自己評価などの項目から構成されている。なお、アンケートは5段階評価として設計されている。5は「強くそう思う」(Q24は「とても満足」)、4は「そう思う」(Q24は「満足」)、3は「どちらでもない」、2は「そう思わない」(Q24は「やや不満足」)、1は「全くそう思わない」(Q24は「不満」)、0は「該当しない・答えたくない※集計の平均値には含めない」を意味している。

調査は、実施期間中の各授業の終了時の15分程度を利用し、原則として科目担当教員がアンケートの指示を出し、教員が教室を退室した後、スマートフォン等で回答入力を学生自身が行なった。メディア授業(遠隔オンデマンド)で開講された科目については、最終授業時または最終課題を提示した時にmanaba courseの各科目コース内で科目担当教員が指示を掲載し、指示から回答までに1週間程度の猶予を設け実施した。科目担当教員は授業科目毎のアンケートデータをmanaba courseでいつでも確認ができ、教員毎の結果は業者に委託して集計され別途通知される。各教員は、授業評価の結果を各自で検討し、その感想・教育活動の振り返りなどについて、全担当科目を総括してティーチング・ポートフォリオを作成した。この文書はmanaba courseにて教員が閲覧することができ、学内において相互の授業改善の工夫等を共有している。

3. 評価

年間の教員別総合満足度の順位を公表する。高評価であった以下 10 名は 2024 年 4 月 9 日付全学部教授会において表彰された。

順位	総合満足度 pt.	所属	教員名 (敬称略)
1	5.00	英語コミュニケーション学科	拝田 清
2	4.92	国際学科	内田 翔大
3	4.840	心理学科	佐瀬 竜一
4	4.839	服飾造形学科	伊藤 瑞香
5	4.82	健康栄養学科	布川 美穂
6	4.7923	全学教育センター	リック・ロマンコ
7	4.7922	看護学科	中澤 明美
8	4.786	看護学科	石川 紀子
9	4.785	英語コミュニケーション学科	河内山 有佐
10	4.779	日本文学文化学科	吉井 美弥子

*総合満足度 pt. は 5 点満点 *オムニバス科目は反映しない *非常勤講師は除く

4. 総括

2023 年度は、2022 年度からの COVID-19 後に多くの科目が対面授業を主体とする中、遠隔オンデマンド授業を含む授業編成の中で、基本的に 2021 年度からの授業評価アンケートを踏襲して実施した。今年度も昨年同様大学の教育の質保証を可視化するために、また、学生自身が 4 年間の学びの目標となる大学のディプロマ・ポリシーを意識するよう評価項目に示し教育の中でも中心を占める授業がそれに答えられているのかを質問した。質問項目は、「Q18 学びの目標達成に近づいた」、「Q19 自分を知り誇りを持つ力が向上した」、「Q20 基礎学力と文章力が向上した」、「Q21 人を理解し自分を表現する力が向上した」、「Q22 課題を解決する力が向上した」、「Q23 社会に役立つ専門力が向上した」について回答してもらった。自己目標の達成に授業がいかに寄与したかについて質問している。

(1) 全学授業評価結果の概要

以下に評価結果の全体概要を示す。個々の授業についての評価結果を全体としてまとめたものが図 1 である。また、授業形態別の評価結果を図 1①②に示した。

授業アンケート結果集計表

【授業】全体				履修者数	48162名
				回収数	28054名
				回収率	58%

項目	回答のみ	回答と 退席	回答の有無		その他
			回答した 人数	回答せず 人数	
Q1 授業開講方法	24686	0	0	3368	0

項目別回答分布(人数と平均値)

	5	4	3	2	1	無回答	全体平均
Q2 シラバスに沿っていた	14651	12049	1090	149	56	59	4.47
Q3 内容が知的刺激に富んでいた	14729	11438	1458	274	96	59	4.44
Q4 新しい知識・技術を学べた	15951	10695	1072	202	73	61	4.51
Q5 理解度に合わせて授業を進めた	13072	11182	2712	687	214	187	4.30
Q6 教材が理解に役立った	14040	11521	1834	351	113	195	4.40
Q7 説明がわかりやすかった	13050	11728	2348	635	213	80	4.31
Q8 質問できる時間や環境があった	12612	11573	2959	508	146	256	4.29
Q9 質問への対応が適切だった	12277	11235	3401	285	141	715	4.29
Q10 出席確認の方法が適切だった	15777	10398	1408	279	109	83	4.48
Q11 運営時間、学習量が適切だった	12754	12419	2056	573	170	82	4.32
Q12 教員の熱意を感じた	14475	11129	1996	258	112	84	4.42
Q13 積極的に意見や質問をした	8418	8779	6626	2552	849	830	3.78
Q14 よく出席・参加した	17125	9008	1497	306	65	53	4.53
Q15 自己学習の時間を確保した	10146	12115	4003	1230	258	302	4.10
Q16 試験や課題に積極的に取り組んだ	13994	11428	1996	328	72	236	4.40
Q17 さらに勉強したくなった	11501	12433	3185	596	215	124	4.23
Q18 学びの目標達成に近づいた	11676	12463	3129	424	181	181	4.26
Q19 自分をより磨き上げることができた	9422	11031	5633	1088	280	600	4.03
Q20 基礎学力と文章力が向上した	10145	12159	4332	728	176	514	4.14
Q21 人を理解し自分を表現する力が向上した	10038	11392	5036	835	210	543	4.10
Q22 課題を解決する力が向上した	10590	12296	4070	563	157	378	4.18
Q23 社会に役立つ専門力が向上した	11877	12184	3137	423	173	260	4.27
Q24 授業の総合満足度	15830	9756	1809	385	189	85	4.45

【Q1-4】で授業への出席率の高い群(5・4)の回答分布

	5	4	3	2	1	無回答	平均
Q3 内容が知的刺激に富んでいた	14499	10366	630	73	9	9	4.54
Q5 理解度に合わせて授業を進めた	12923	10438	1785	286	36	118	4.41
Q6 教材が理解に役立った	13831	10491	1006	106	17	135	4.49
Q7 説明がわかりやすかった	12917	11041	1373	219	16	20	4.43

【Q1-4】で授業への出席率の低い群(3・2・1)の回答分布

	5	4	3	2	1	無回答	平均
Q3 内容が知的刺激に富んでいた	215	1052	821	199	84	12	3.47
Q5 理解度に合わせて授業を進めた	139	732	919	398	172	23	3.11
Q6 教材が理解に役立った	197	1014	817	240	94	21	3.41
Q7 説明がわかりやすかった	121	675	968	411	190	18	3.05

図 1 全体

2023年度通期 和洋女子大学

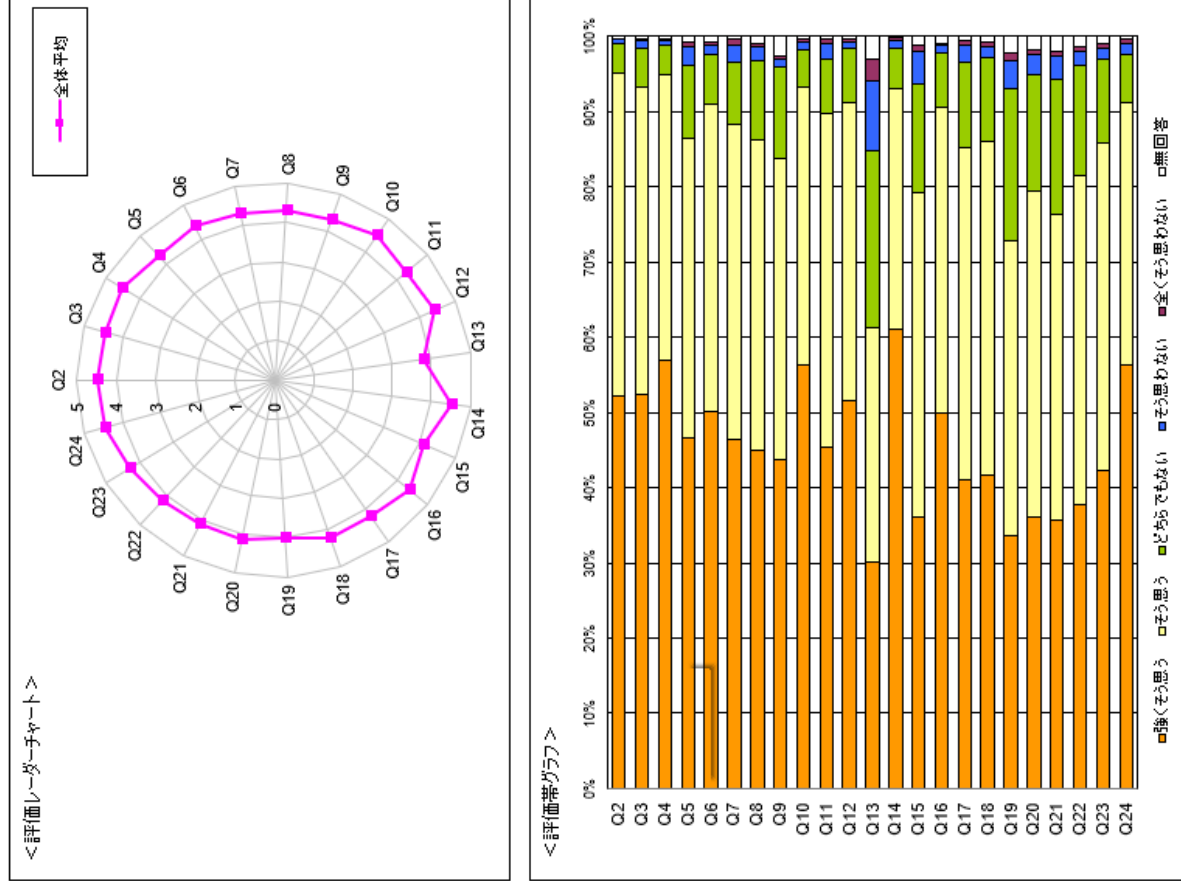
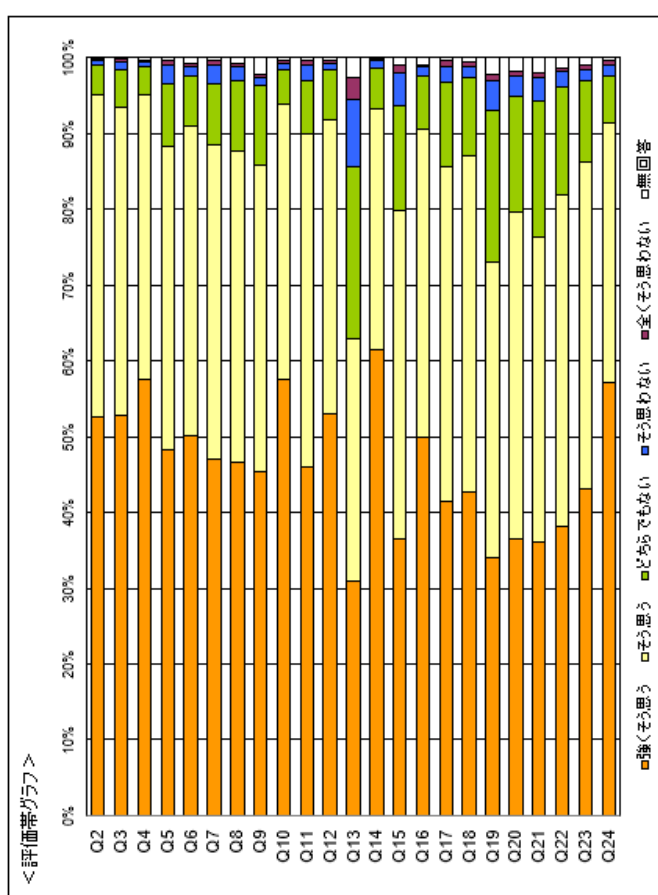
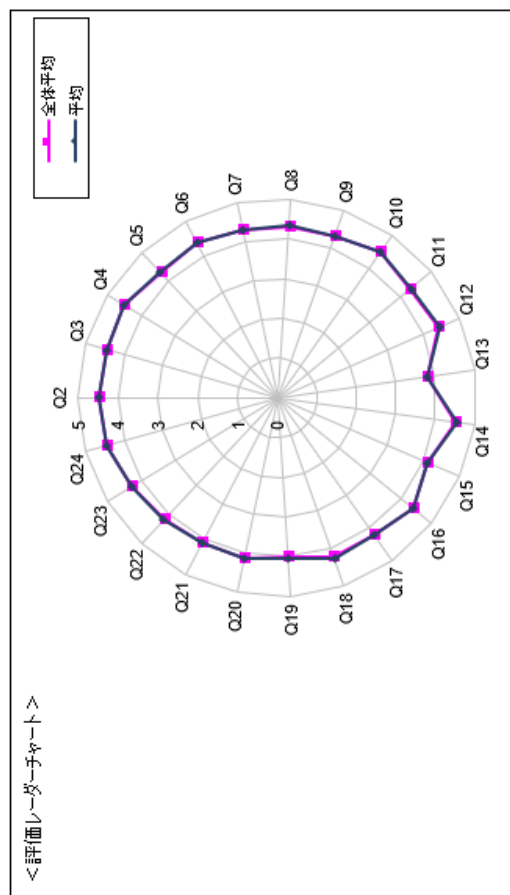


図1 ①対面授業のみ



キャンペーン				関係者数	
学部		曜日		回収数	24686名
科目		時間		回収率	
教員		対面授業のみ			

	校舎の心算	計算問題	文章問題	その他
Q1:授業方法	24686	0	0	0

項目別回答分布(人数と平均値)	5	4	3	2	1	無回答	平均	全体平均
Q2:シラバスに沿っていた	12971	10523	963	128	51	50	4.47	4.47
Q3:内容は知り尽くしたと感じた	13059	10013	1246	233	85	50	4.45	4.44
Q4:新しい知識・技術を学べた	14186	9296	913	173	66	52	4.52	4.51
Q5:理解度に合わせて授業を進めた	11914	9888	2032	600	186	66	4.33	4.30
Q6:教材が理解が役立った	12375	10075	1644	316	101	175	4.40	4.40
Q7:説明がわかりやすかった	11620	10212	2027	575	195	57	4.32	4.31
Q8:質問できる時間や環境があった	11500	10177	2294	419	124	172	4.33	4.29
Q9:質問への対応が適切だった	11210	9991	2596	246	122	521	4.32	4.29
Q10:出席確認の方法が適切だった	14228	8954	1125	223	93	63	4.50	4.48
Q11:運営時間、学習量が適切だった	11377	10816	1761	517	147	68	4.33	4.32
Q12:教員の熱意を感じた	13066	9605	1632	223	97	63	4.43	4.42
Q13:積極的に意見や質問をした	7619	7898	5637	2194	704	634	3.81	3.78
Q14:よく出席・参加した	15198	7839	1296	254	58	41	4.54	4.53
Q15:自己学習の時間を確保した	9032	10672	3447	1070	217	248	4.11	4.10
Q16:設備や課題・積極的取り組み組んだ	12310	10067	1745	282	64	218	4.40	4.40
Q17:さらに勉強したくなった	10247	10883	2755	520	183	98	4.24	4.23
Q18:学びの目標達成に近づいた	10546	10965	2546	349	145	135	4.28	4.26
Q19:学びを知り深め、力を持つが向上した	8380	9657	4918	974	234	523	4.03	4.03
Q20:基礎学力と文筆力が向上した	9017	10635	3767	657	151	459	4.14	4.14
Q21:人を理解し自分を表現する力が向上した	8917	9957	4405	752	181	474	4.10	4.10
Q22:課題を解決する力が向上した	9417	10817	3498	496	133	325	4.19	4.18
Q23:社会に役立つ専門力が向上した	10652	10666	2646	364	145	213	4.28	4.27
Q24:授業の総合満足度	14091	8461	1549	342	168	75	4.46	4.45

	5	4	3	2	1	無回答	平均
【Q14】で授業への出席率の高い群(5・4)の回答分布							
Q3 内容は知的好奇心に高んでいた	7101	5366	538	117	25	12	4.48
Q5 理解度に合わせて授業を進めた	6522	5262	975	302	78	20	4.36
Q6 教材が理解に役立った	6789	5360	728	137	41	104	4.43
Q7 説明がわかりやすかった	6366	5432	987	278	79	17	4.35

	5	4	3	2	1	無回答	平均
Q3 内容は知的刺激に富んでいた	197	407	242	34	29	8	3.78
Q5 理解度に合わせて授業を進めた	181	357	273	64	34	8	3.65
Q6 教材が理解に役立った	194	388	252	47	24	12	3.75
Q7 説明がわかりやすかった	174	361	272	64	39	7	3.62

授業アンケート結果集計表

キャンパス	曜日	曜日	履修者数	3368名
学部	時間	時間	回収数	回収率
科目	メディア授業(遠隔オンデマンド)のみ			
教員				

項目	回答のみ	回答と 退席	メディア授業 (遠隔オンデマンド) 45分以内	メディア授業 (遠隔オンデマンド) 50分以上	その他
Q1. 授業開講方法	0	0	0	3368	0

項目別回答分布(人数と平均値)	5	4	3	2	1	無回答	平均	全体平均
Q2 シラバスに沿っていた	1680	1526	127	21	5	9	4.45	4.47
Q3 内容は知的刺激に富んでいた	1670	1425	212	41	11	9	4.40	4.44
Q4 新しい知識・技術を学べた	1765	1399	159	29	7	9	4.45	4.51
Q5 理解度に合わせて授業を進めた	1158	1294	680	87	28	121	4.07	4.30
Q6 教材が理解に役立った	1665	1446	190	35	12	20	4.41	4.40
Q7 説明がわかりやすかった	1430	1516	321	60	18	23	4.28	4.31
Q8 質問できる時間や環境があった	1112	1396	665	89	22	84	4.06	4.29
Q9 質問への対応が適切だった	1067	1244	805	39	19	194	4.04	4.29
Q10 出席確認の方法が適切だった	1549	1444	283	56	16	20	4.33	4.48
Q11 運営時間、学習量が適切だった	1377	1603	295	56	23	14	4.27	4.32
Q12 教員の熱意を感じた	1409	1524	364	35	15	21	4.28	4.42
Q13 積極的に意見や質問をした	799	881	989	358	145	196	3.58	3.78
Q14 よく出席・参加した	1927	1169	201	52	7	12	4.48	4.53
Q15 自己学習の時間を確保した	1114	1443	556	160	41	54	4.03	4.10
Q16 試験や課題で積極的に取り組んだ	1684	1361	251	46	8	18	4.39	4.40
Q17 さらに勉強したくなった	1254	1550	430	76	32	26	4.17	4.23
Q18 学びの目標達成に近づいた	1130	1498	583	75	36	46	4.09	4.26
Q19 自分を知り誇りを持つ力が向上した	1042	1374	715	114	46	77	3.99	4.03
Q20 基礎学力と文章力が向上した	1128	1524	565	71	25	55	4.10	4.14
Q21 人を理解し自分を表現する力が向上した	1121	1435	631	83	29	69	4.07	4.10
Q22 課題を解決する力が向上した	1173	1479	572	67	24	53	4.12	4.18
Q23 社会に役立つ専門力が向上した	1225	1518	491	59	28	47	4.16	4.27
Q24 授業の総合満足度	1739	1295	260	43	21	10	4.40	4.45

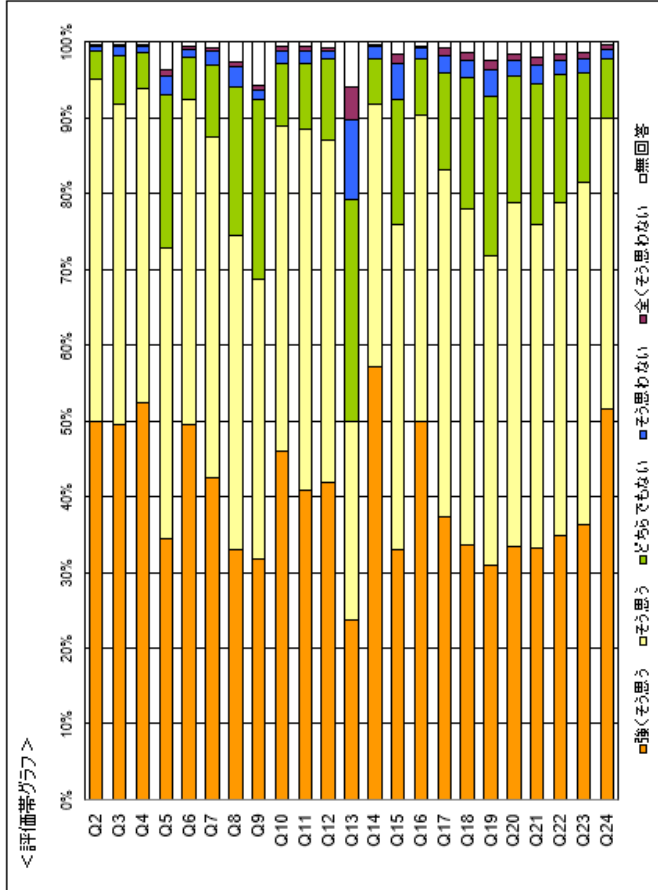
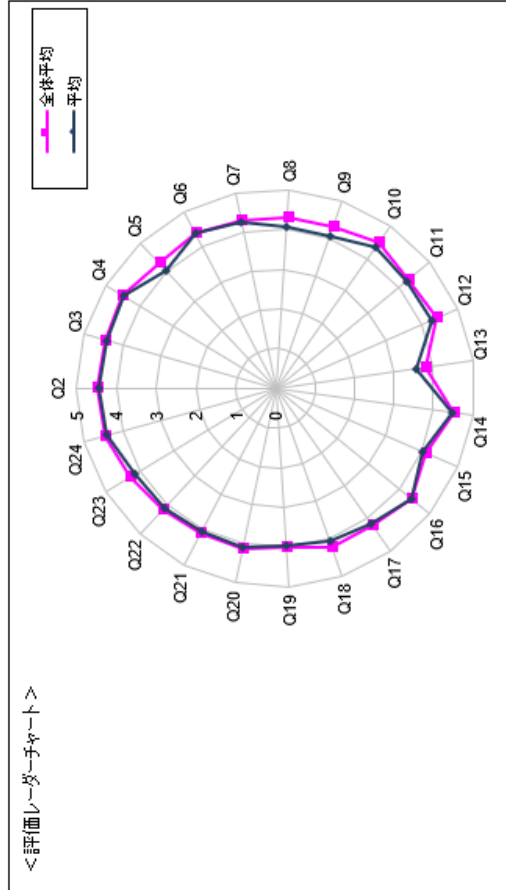
【Q1-4】で授業への出席率の高い群(5・4)の回答分布

	5	4	3	2	1	無回答	平均
Q3 内容は知的刺激に富んでいた	1043	849	81	13	2	1	4.47
Q5 理解度に合わせて授業を進めた	726	781	349	49	7	77	4.13
Q6 教材が理解に役立った	1056	835	77	9	2	10	4.48
Q7 説明がわかりやすかった	903	909	147	18	3	9	4.36

【Q1-4】で授業への出席率の低い群(3・2・1)の回答分布

	5	4	3	2	1	無回答	平均
Q3 内容は知的刺激に富んでいた	41	54	43	9	3	0	3.81
Q5 理解度に合わせて授業を進めた	24	43	62	13	6	2	3.45
Q6 教材が理解に役立った	35	64	36	11	3	1	3.79
Q7 説明がわかりやすかった	27	50	50	16	7	0	3.49

図1 ②メディア授業(遠隔オンデマンド)のみ

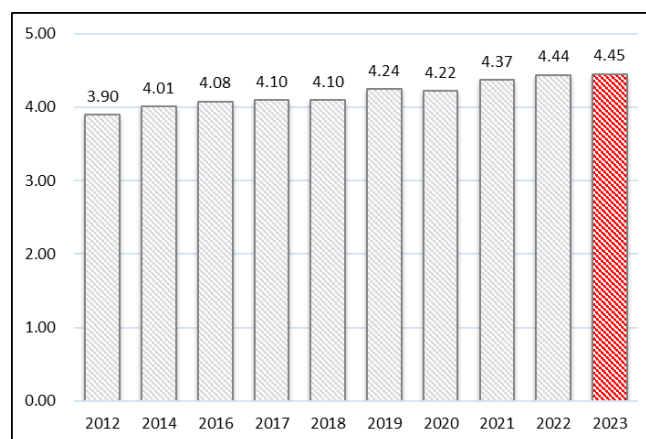


調査結果では、対象科目の履修者数は 48,162 名、回収数 28,054 名、回収率 58%を示し前回調査（2022 年度）の回収率 65%を大幅に下回った。今期の授業形態は、「対面授業のみ」88.0%、「遠隔オンデマンドのみ」12.0%であった。

全質問項目 Q2～Q24 は、評価値（3.78）から（4.55）の範囲内にあり前年度比では、多くの項目でわずかであるが上昇がみられたが、「Q14 よく出席・参加した」については、2022 年度では、「強くそう思う」「そう思う」を合算すると 93.6%になり評価値（4.55）であったが、2023 年度においては、93.1%であり、評価値（4.53）で唯一この項目が前年度を下回った。「Q13 積極的に意見や質問をした」は、例年すべての項目中で最も低値である。しかしながら、2022 年度（3.69）にくらべ 2023 年度は（3.78）と上昇した。

2023 年度の総評としては、自己学習の時間が大きく伸び、出席参加も良いが「積極的に意見を言ったり質問をすることはしない」という従来の学生像に変化はなかった。「Q24 授業の総合的満足度」は、2022 年度の平均評価（4.44）から（4.45）へと（0.01）ポイント上昇した。図 2 に 2012 年度～2023 年度までの推移を示す。2012 年度の（3.90）から年々総合満足度が上昇していることは評価さるべきことであるが、低評価の項目についての改善に取り組む必要はある。

図 2 総合満足度の推移



1) 教員の授業設計と運営について

教員の授業設計と運営についての質問項目は、Q2～Q12 である。

① 知的刺激

学生の知的好奇心を刺激し学習に取り組む意欲を起こさせる教授内容については、「Q3 内容は知的刺激に富んでいた」(4.44)、「Q4 新しい知識・技術を学べた」(4.51)、「Q6 教材(配付資料、動画、音声、パワーポイント)が理解に役立った」(4.40)、「Q11 運営時間、学習量が適切だった」(4.48)と概ね高い評価であった。知的刺激によって「Q17 さらに勉強したくなった」についての評価平均値は前回(4.22)とほぼ同様(4.23)にとどまった。そのことから、授業中に受けた知的刺激が学習意欲を十分に引き出すまでには至っていないように思われる。

② 方法・スキル

教授方法・スキルについての質問項目は Q2、Q5 ～Q10 までである。それぞれの評価平均値を見てみると、「Q5 学生の反応や理解度を考慮しながら授業を進めた」(4.30)(2022 年度は 4.26)であり、年々わずかに上昇している。「Q6 教材が理解に役立った」(4.40)、「Q7 説明がわかりやすかった」(4.31)であり、評価されているように考えられる。また、授業方法によっては課題ともいえる「Q12 教員の熱意を感じた」(4.42)、「Q8 質問できる時間や環境があった」(4.29)、「Q9 質問への対応が適切だった」(4.29)、「Q10 出席確認の方法が適切だった」(4.48)と概ね評価されている。これらは、教員が授業スキルの向上とともに、学生の授業の総合満足度向上につながっているものと考えられる。

③ 授業の進め方

教員の授業の進め方について学生がどのように評価しているかは、2 つの質問項目の評価平均値、「Q2 シラバスに沿っていた」(4.47)(2022 年度は 4.46)、「Q11 運営時間、学習量が適切だった」(4.32)と前年度(4.30)よりも上昇しており、おおむね評価されていると推測できる。

④ 主体的な学びの促進

大学での学びにおいては学生が自ら学び、考える姿勢を修得することが求められる。しかし、大学のユニバーサル化が進むにつれて、目的意識が希薄で主体的に学ぼうとする学生が少なくなったと指摘されることが多くなった。今回のアンケート調査では受講者の主体的な学びを引き出す質問項目と考えられるのは、「Q3. 内容は知的刺激に富んでいた」(4.44)、「Q9. 質問への対応が適切だった」(4.29)、「Q13 積極的に意見や質問をした」(3.78)、「Q17. さらに勉強したくなった」(4.23)であり前年度比においてやや上昇しており、おおむね主体性の喚起はできていると思われる。主体的な学びに欠かせない自己学習の時間であるが 2019 年度以前の調査では、評価平均 2 にとどかなかったが 2023 年度は、「Q15. 自己学習時間」(4.10)であり 2022 年度(4.07)よりも上昇した。これが学生の主体的な学びに直結しているかは判断できないが考慮する一因にはなると考える。主体的な学びを導く学習環境のひとつの要素として、授業において教員の熱意が受講者に感じられるかどうかがある。担当する教員の熱の入った授業は、受講者にとって強い刺激を与えるものであり、教員にとっても学生の「Q12. 教員の熱意が感じられた」かどうかは、最も関心を払わなければならない質問項目であろう。この点で、「Q12. 教員の熱意を感じた」の評価値は 2021 年度(4.35)、2022 年度(4.41)から、2023 年度は(4.42)

となり、徐々に向上している。対面中心になったことも影響している可能性はあるが、総じて肯定的な評価が下されていると見なすことができる。

2) 出席率の高低群と授業評価について

次に授業への出席・参加の高低による授業評価の差について見てみる(表1)。対比項目は「Q3 内容は知的刺激に富んでいた」、「Q5 理解度に合わせて授業を進めた」、「Q6 教材(配付資料、動画、音声、パワーポイント)が理解に役立った」、「Q7 説明がわかりやすかった」の4項目である。結果は、4項目すべてにおいて出席・参加率の高い学生は教員の授業方法スキルについて高い評価を下している。一方、出席・参加率の低い学生は4項目すべて平均評価4に届いていなかった。しかしながら、昨年度と比べると、出席・参加率の高い学生評価は上昇しているが、低い学生は、全項目で評価が低下しており、2022年度の差が概ね0.56～0.59であったのに対し、2023年度では、1.07～1.38と広がっており、出席・参加率が低い学生への対策・対応が必要と思われる。最も差の大きい「Q7 説明が分かりやすかった」は授業への出席・参加率の高い学生において(4.43)に対し、出席率の低い群では(3.05)と1.38の差があった。授業への出席・参加率の高い学生において「Q3 知的刺激に富んでいた」は出席率の低い群(3.47)に比し高い(4.54)。それは主体的な学びへと結びつきやすいと考えられるのに対して、出席・参加率の低い学生では、主体的な学びをはじめ、知識定着の学びにつながっていないように思われる。本学では「きめ細かな指導」を教育の柱のひとつとして掲げ、出欠調査等を通じて欠席しがちな学生への指導を継続して行ってきた。また遠隔オンデマンド等では参加状況を把握し参加の悪い学生には個別に参加を促している。学科別の出席・参加率については次項(2)の表4-1・4-2を参照。

表1 出席率による評価

評価項目	出席・参加率 が高い群	出席・参加率 が低い群	差
Q3.内容は知的刺激に富んでいた	4.54	3.47	1.07
Q5.理解度を考慮しながら授業を進めた	4.41	3.11	1.30
Q6.教材(配布資料、動画、音声、パワポなど)が理解に役立った	4.49	3.41	1.08
Q7.説明がわかりやすかった	4.43	3.05	1.38

3) 授業形態別による評価

①授業形態について

2023年度は、授業方法が、「対面授業」および「遠隔オンデマンド」となった。次に授業形態別に見た授業評価についてまとめる。2023年度の授業形態は、「対面授業のみ」88.0%、「遠隔オンデマンドのみ」12.0%の比率であった。多くの項目で、対面授業の方がわずかであるが高い値であるが、「Q24 授業の総合満足度」においては「対面授業」(4.46)で「遠隔オンデマンド」(4.40)と若干の評価の違いがあった。

②学科別の授業形態比率

表2に示すとおり、全体的には授業形態として多かったのは対面授業であり90%～100%である(共通科目を除く)。

表 2 学科別授業形態

	授業形態(%)					回答数 (名)
	対面のみ	対面と遠隔	遠隔リアルタイム有り	遠隔オンデマンドのみ	その他	
共通科目	44.0%	0.0%	0.0%	56.0%	0.0%	4,769
共通科目 (外国語)	99.5%	0.0%	0.0%	0.5%	0.0%	1,715
共通科目 (資格)	99.7%	0.0%	0.0%	0.3%	0.0%	1,169
日本文学文化学科	99.3%	0.0%	0.0%	0.7%	0.0%	2,471
心理学科	90.2%	0.0%	0.0%	9.8%	0.0%	2,045
こども発達学科	99.5%	0.0%	0.0%	0.5%	0.0%	2,189
英語コミュニケーション学科	99.6%	0.0%	0.0%	0.4%	0.0%	740
国際学科	100.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	899
服飾造形学科	98.6%	0.0%	0.0%	1.4%	0.0%	1,219
健康栄養学科	99.7%	0.0%	0.0%	0.3%	0.0%	4,880
家政福祉学科	99.7%	0.0%	0.0%	0.3%	0.0%	1,863
看護学科	99.4%	0.0%	0.0%	0.6%	0.0%	3,174
全体	88.0%	0.0%	0.0%	12.0%	0.0%	28,054

③授業形態による評価の違いの傾向と遠隔授業の課題

質問項目全 21 項目の評価値をみると殆ど変化はなく同じような傾向を示していた。表 3 に授業形態による評価を抜粋して示した。前項でも示したとおり、質問項目の中でも注視した「Q13 積極的に意見や質問をした」では、「対面授業」(3.81) に対し、「遠隔オンデマンド」(3.58) と (0.23) の差がついた。授業形態にはそれぞれ長短相補う必要があるが学生の授業評価という点からは、多くの授業が「対面授業」となっていることから、教員は限られた ICT 環境とスキルを活用して授業に取り組む必要がある。従来授業は「対面」を前提に評価もおこなってきた。学生と教員は、多様な授業形態を経験して、今後、授業のハイブリッド化は進むと考える。Active Learning、e-Learning、Service Learning、PBL、反転授業、インターンシップなどの方法が混在し多くの教育コンテンツが蓄積されていくだろう。オンラインラーニングは標準となりそれを支えるマルチメディア教材作成のための支援室やインフラの整備が必要となってくる。

表3 授業形態による評価

質問項目	授業形態					全体平均
	対面のみ	対面と遠隔	遠隔リアルタイム有り	遠隔オンデマンドのみ	その他	
Q3.内容は知的刺激に富んでいた	4.45	0.00	0.00	4.40	0.00	4.44
Q13.積極的に意見や質問をした	3.81	0.00	0.00	3.58	0.00	3.78
Q14.よく出席・参加した	4.54	0.00	0.00	4.48	0.00	4.53
Q15.自己学習の時間を確保した	4.11	0.00	0.00	4.03	0.00	4.10
Q17.さらに勉強したくなった	4.24	0.00	0.00	4.17	0.00	4.23
Q18.学びの目標達成に近づいた	4.28	0.00	0.00	4.09	0.00	4.26
Q24.授業の総合満足度	4.46	0.00	0.00	4.40	0.00	4.45

(2) 授業の総合満足度からみた今後の課題

2023 年度授業評価アンケートの各項目の平均を表 4-1、4-2 に示した。以下では、共通総合科目・専門科目別に、これをもとにした各学科長（全学教育センターのみセンター長）の考察をあげる。なお、2023 年度は回収率が低下した（2022 年度 65%⇒2023 年度 58%）。2022 年度よりより回答方法を manaba course を利用した方式に変更し授業内での回収を促し回収率が上昇したものの 2023 年度では、7%低下した。今後さらなる回収率の上昇に向けた取り組みが必要となる。

表 4-1 2023 年度 授業評価アンケート各項目平均(共通総合科目)

No.	設問	全体	全セ (共通)	全セ (共通外国語)	全セ (共通資格)
Q2	この授業はシラバス(変更したシラバスも含む)に沿っていた	4.47	4.47	4.42	4.45
Q3	この授業の内容は知的刺激に富んでいた	4.44	4.42	4.32	4.48
Q4	この授業で新しい知識・技術を学べた	4.51	4.50	4.35	4.56
Q5	教員は学生の反応や理解度を考慮しながら授業を進めた	4.30	4.22	4.38	4.34
Q6	教材(配布資料、動画、音声、パワポなど)が理解に役立った	4.40	4.42	4.32	4.41
Q7	教員の説明がわかりやすかった	4.31	4.34	4.21	4.31
Q8	教員へ質問できる時間や環境があった	4.29	4.20	4.33	4.29
Q9	教員の質問への対応が適切だった	4.29	4.19	4.32	4.26
Q10	出席確認の方法が適切であった	4.48	4.42	4.48	4.46
Q11	この授業の運営時間、学習量が適切だった	4.32	4.33	4.34	4.31
Q12	この授業から教員の熱意を感じた	4.42	4.34	4.40	4.54
Q13	自分自身もこの授業で積極的に意見や質問をした	3.78	3.69	3.98	3.73
Q14	この授業はよく出席・参加した	4.53	4.51	4.53	4.57
Q15	この授業では予習・復習などを含め自己学習の時間を確保した	4.10	4.01	4.12	4.09
Q16	この授業のレポートや試験に積極的に取り組んだ	4.40	4.41	4.39	4.43
Q17	この授業から新たな興味や関心が生まれ、さらに勉強したくなった	4.23	4.19	4.01	4.25
Q18	この授業により、自身の大学での学びの目標達成に近づいた	4.26	4.13	4.03	4.32
Q19	この授業により、「自分を誇りを持つ力」が向上した	4.03	4.01	3.87	4.00
Q20	この授業により、「基礎学力と文章力」が向上した	4.14	4.12	4.17	4.09
Q21	この授業により、「人を理解し自分を表現する力」が向上した	4.10	4.10	4.01	4.11
Q22	この授業により、「課題を解決する力」が向上した	4.18	4.15	4.05	4.17
Q23	この授業により、「社会に役立つ専門力」が向上した	4.27	4.17	4.05	4.34
Q24	あなたのこの授業に対する総合的な満足度を示してください	4.45	4.47	4.39	4.49
	回収率 (%)	58%	49%	69%	61%

表 4-2 2023 年度 授業評価アンケート各項目平均(専門科目)

No.	設問	全体	日文	心理	こども	英コミ	国際	服飾	健康	家福	看護
Q2	この授業はシラバス(変更したシラバスも含む)に沿っていた	4.47	4.51	4.50	4.43	4.64	4.58	4.43	4.49	4.49	4.38
Q3	この授業の内容は知的刺激に富んでいた	4.44	4.49	4.48	4.48	4.63	4.53	4.49	4.43	4.48	4.36
Q4	この授業で新しい知識・技術を学べた	4.51	4.52	4.56	4.54	4.63	4.60	4.58	4.50	4.56	4.44
Q5	教員は学生の反応や理解度を考慮しながら授業を進めた	4.30	4.32	4.35	4.34	4.57	4.48	4.27	4.25	4.35	4.25
Q6	教材(配布資料、動画、音声、パワポなど)が理解に役立った	4.40	4.43	4.44	4.38	4.60	4.55	4.36	4.37	4.45	4.32
Q7	教員の説明がわかりやすかった	4.31	4.35	4.33	4.31	4.59	4.49	4.29	4.26	4.39	4.24
Q8	教員へ質問できる時間や環境があった	4.29	4.34	4.41	4.32	4.62	4.44	4.36	4.27	4.27	4.23
Q9	教員の質問への対応が適切だった	4.29	4.34	4.36	4.30	4.63	4.45	4.35	4.25	4.31	4.23
Q10	出席確認の方法が適切であった	4.48	4.49	4.47	4.50	4.67	4.61	4.49	4.52	4.54	4.44
Q11	この授業の運営時間、学習量が適切だった	4.32	4.37	4.34	4.33	4.55	4.46	4.24	4.28	4.37	4.23
Q12	この授業から教員の熱意を感じた	4.42	4.50	4.44	4.47	4.61	4.58	4.44	4.34	4.47	4.36
Q13	自分自身もこの授業で積極的に意見や質問をした	3.78	3.69	3.70	3.75	4.23	4.03	3.77	3.75	3.76	3.90
Q14	この授業はよく出席・参加した	4.53	4.50	4.45	4.58	4.60	4.63	4.48	4.52	4.58	4.53
Q15	この授業では予習・復習などを含め自己学習の時間を確保した	4.10	3.99	4.08	4.17	4.30	4.28	4.04	4.15	4.13	4.18
Q16	この授業のレポートや試験に積極的に取り組んだ	4.40	4.32	4.38	4.41	4.55	4.59	4.33	4.37	4.48	4.39
Q17	この授業から新たな興味や関心が生まれ、さらに勉強したくなった	4.23	4.22	4.25	4.31	4.46	4.37	4.22	4.20	4.35	4.25
Q18	この授業により、自身の大学での学びの目標達成に近づいた	4.26	4.16	4.30	4.39	4.46	4.33	4.30	4.31	4.37	4.28
Q19	この授業により、「自分を誇りを持つ力」が向上した	4.03	3.90	4.10	4.06	4.31	4.22	3.89	3.99	4.17	4.10
Q20	この授業により、「基礎学力と文章力」が向上した	4.14	4.13	4.13	4.14	4.44	4.30	3.95	4.11	4.19	4.14
Q21	この授業により、「人を理解し自分を表現する力」が向上した	4.10	4.01	4.21	4.20	4.36	4.32	3.90	3.97	4.22	4.15
Q22	この授業により、「課題を解決する力」が向上した	4.18	4.06	4.23	4.26	4.38	4.36	4.12	4.14	4.29	4.20
Q23	この授業により、「社会に役立つ専門力」が向上した	4.27	4.04	4.34	4.40	4.38	4.38	4.30	4.32	4.43	4.30
Q24	あなたのこの授業に対する総合的な満足度を示してください	4.45	4.51	4.49	4.48	4.67	4.53	4.48	4.39	4.50	4.37
	回収率 (%)	58%	52%	57%	80%	59%	55%	55%	66%	59%	55%

1) 共通総合科目(全学教育センター)の課題 (全学教育センター長 鬘谷要)

①授業の総合満足度及びそれにかかわる要因

まず、2023年度の全学教育センターでは、前年から若干回復し総合満足度はほぼ大学平均に一致しているものの、個別項目では大学平均に対し+0.19～-0.23の範囲に分布しており、概ねやや低い評価というところである。

ここ3年間の全学教育センターの3分野(共通、外国語、資格)の平均の推移を見てみると2021年度は全体で+0.07と大学平均を若干ではあるが上回っていたが、2022年度では-1.07と顕著な低下を示し、2023年度は-0.61と前年度よりは回復したものの、依然低値であった。分野毎、設問毎に確認すると3年間常に明確な低値を示したのが共通のQ8、Q9、Q13、外国語のQ3、Q4、Q17、Q18、Q22、Q23、および資格のQ13、Q18であった。共通のQ8、Q9、Q13はいずれも教員への質問機会やその対応に関するものであり、オンデマンド科目の増加による影響が考えられる。外国語のQ3、Q4、Q17、Q18、Q22、Q23は内容への興味や好奇心、知的刺激を受けたか等に加え課題解決や専門力を問うもので、外国語(英語)には馴染みにくい評価視点であることが推察される。資格のQ13、18は、質問や意見、大学での学びの目標の成就を問うており、資格が大学の学びの最終目標と必ずしも一致しなかった可能性が伺える。しかしながら資格に関しては、2023年度に対大学平均で+0.32と全学教育センターの中では唯一プラスに転じており、授業全体では良い評価を受けている。

2022年度、2023年度は全体としてマイナス評価が目立つ中で、2年連続で明確なプラスを示した項目が外国語のQ13と資格のQ12である。前者は質問や意見、後者は教員の熱意である。

②今後の課題

2022年度より若干の回復があったものの2023年度も総じて設問個々の評価は高くなく、教員が評価のフィードバックによる改善意識を強く持つことも必要であろう。履修の優先度やモチベーションから、どうしても教養科目は専門科目の二の次になってしまうところに本質的な課題がある事と考えられる。一方、個々の評価が高くない割には、総合満足度は平均に近いところから、学生が共通総合科目には専門と異なる価値観を持っている事が伺える。

また、評価のための設問自体が専門科目向けに設計されているため、教養、外国語、資格で構成される共通総合科目には不利となっている可能性も否定出来ない。共通総合科目には別の設問を検討する必要があると考えられる。

2) 日本文学文化学科の専門科目の課題 (学科長 佐藤勝明)

①授業の総合満足度及びそれにかかわる要因

総合満足度の数値は4.51で、全学平均の4.45をわずかながら上回る結果となった。2022年度は全学の4.45に対する4.47、2021年度は全学の4.37に対する4.41という数値であったので、ここに本学科への普遍的な満足度を読み取ってよいかと考える。各項目の数値を見ていくと、Q2「シラバスに沿っていた」、Q3「知的刺激に富んでいた」、Q5「学生の反応や理解度を考慮しながら授業を進めた」、Q7「教材が理解に役立った」など、授業の内容や進め方に関するほとんどすべての項目で、全学平均を少しずつ上回る数値を得ており、こうした積み重ね(すなわち、各教員がしっかりした計画に基づき、高度な教育内容を扱いながら、学生のニーズにも対応した授業を心がけていること)が、総合満足度につながる要因なのだと考えられる。しかし、②に記すような、全学平均を下回る項目もたしかにあり、それが総合満足度における著し

いマイナス要因になってはいないにしても、無視せずに考えていくべき問題であることも間違いない。

②今後の課題

全学平均との差異だけを問題にすればよいというわけではなくとも、下回る項目についてはやはりその原因を探る必要がある。本学科では、下回る項目に2つの傾向を指摘することができる。その1は、Q13「積極的に意見・質問をした」が全学平均3.78に対して3.69、Q15「予習・復習などを含め自己学習の時間を確保した」が全学平均4.10に対して3.99であるなど、学生自身の行為・活動に関する項目で数値が低めであるということ。その2は、Q19「『自分を知り誇りを持つ力』が向上した」が全学平均4.03に対して3.90、Q23「『社会に役立つ専門力』が向上した」が全学平均4.27に対して4.04であるなど、学生の自己肯定感や社会性につながる項目で数値が低めであるということ。その2に関しては、文学作品・芸術作品（書道を含む）や文化事象を主として扱う本学科の特性から、「誇りを持つ」や「社会に役立つ」という意識が育ちにくいということが指摘できるかもしれない。実利・実務とは一線を画する文学・芸術・文化を学ぶことで、いかにしたら誇りや社会への目を培っていくことができるのか。ここに本学科の抱える課題の一つがある。その1に関しては、どのようにしたら学生の主体的で能動的な学修活動を導くことができるのか、という問題が明示された恰好であり、ここに本学科として追究すべきもう一つの課題があったことになる。どちらも一朝一夕に解決されるようなものではなく、地道な対応が必要なのであるが、まずは学科としてこれらの課題を共有する必要がある。そして、とくにその1（中でもQ13）の項目は全学平均も低めであり、全学的に取り組むべき課題でもあらうかと考える。FDなどの機会がこうしたことに活用されることも、一つの方策ではないかと、期待する次第である。

3) 心理学科の専門科目の課題（学科長 池田幸恭）

①授業の総合満足度及びそれにかかわる要因

心理学科の授業の総合満足度（Q24）は「4.49」であり、2022年度の4.52を若干下回ったが、全体平均の4.45を上回り、大学全体においても高い評価を得ることができた。授業評価アンケートの各項目において、特に全体平均より高い評価を得ていたのは、前年度と同様に「Q21. この授業により、『人を理解し自分を表現する力』が向上した」（全体平均4.10、心理学科4.21）、「Q19. この授業により、『自分を知り誇りを持つ力』が向上した」（全体平均4.03、心理学科4.10）、「Q23. この授業により、『社会に役立つ専門力』が向上した」（全体平均4.27、心理学科4.34）であった。心理学科のディプロマ・ポリシーである「事実を知るためのデータを適切に収集し分析する力、人と人の関係を円滑にするコミュニケーション力、人の心の基礎を理解し人を支える力を身につけている」、「論理的な説明力、文章力、発表力をもとに議論する技術を学び、社会人の基礎となる力を身につけている」などに対応した教育成果がみられた。このように授業が自身を成長させる場であることを学生が認識していることが、昨年度から継続して示された。

また、「Q8. 教員へ質問できる時間や環境があった」は全体平均4.29に対して心理学科では4.41、「Q9. 教員の質問への対応が適切であった」は全体平均4.29に対して4.36であり高い評価を得ていた。授業評価に及ぼす要因としてクラスサイズ（履修人数）が想定されるが、2023年度の授業形態は「対面のみ」が90.2%となり、2021年度の10.0%、2022年度の68.9%に比べ

て多くなっている。心理学科では全学対象のピアヘルパー資格を遠隔授業として開講しており、他学科の学生も多く履修している。このような状況の中で、学科で連携して、一人ひとりの学生への丁寧な対応を継続することができたと考えられた。

他方で、「Q13. 自分自身もこの授業で積極的に意見や質問をした」は、全体平均 3.78 に対して心理学科では 3.70 であり評価が下回っていたが、2022 年度の 3.56 からは大きく向上していた。また、「Q14. この授業はよく出席・参加した」は、全体平均 4.53 に対して心理学科では 4.45 であった。これらの結果には、前述した授業形態の変化も関係していると考えられる。あわせて、心理学の特徴を踏まえて、学生における資質およびキャリアの広範な個人差を意識して教育を展開する必要があるといえる。

②今後の課題

心理学科では、現カリキュラムの成果と課題を踏まえて、カリキュラム改定について検討した。カリキュラムの移行に伴い、現カリキュラムの学生が卒業まで安心して学び続けることができるように履修指導を行う。

さらに、授業が自身を成長させる場であることを学生たちが認識しているという授業評価の結果をフィードバックすることで、学生の主体的な学びを促すことにもつながると考えられる。このことに、学習成果の可視化という観点からも継続して取り組んでいく。

また、授業評価アンケートの心理学科の回収率は 57%であり、2021 年度 39%、2022 年度 54%であり増加しており、全体平均の 58%とも同程度であった。授業評価アンケートの回収率の向上も課題である。

4) こども発達学科の専門科目の課題 (学科長 大神優子)

①授業の総合満足度及びそれにかかわる要因

2023 年度授業アンケートの各項目を全体平均と比較すると、23 項目中 20 項目が全体平均を上回っていた。総合満足度は昨年度と同じく 5 点中 4.48 であり、他学科と比較して特筆して高いとは言えないが、免許・資格関連の必修科目が多い学科としては健闘しているといえる。

全体平均よりわずかながら下回った項目は、Q2「この授業はシラバス（変更したシラバスも含む）に沿っていた」（全体が 4.47、本学科は 4.43）、Q6「教材（配布資料、動画、音声、パワポなど）が理解に役立った」（全体が 4.40、本学科は 4.38）、Q13「自分自身もこの授業で積極的に意見や質問をした」（全体が 3.78、本学科は 3.75）の 3 項目であった。ただし、これらの 3 項目を昨年度の本学科の同項目の平均と比較すると、いずれも上昇していた。なかでも Q13「自分自身もこの授業で積極的に意見や質問をした」は、全体平均こそやや下回ったものの、昨年度の本学科平均と比較すると、3.66 から 3.75 へと比較的大きな向上がみられた。同様に昨年度から平均得点の伸びが認められた項目としては、Q15「この授業では予習・復習などを含め自己学習の時間を確保した」（昨年度学科平均 4.10 から 4.17）があげられ、各授業でこれらの点について、教員が重点的に工夫した結果と推測できる。

昨年度の本学科平均と比較すると、これらの項目に加えて、Q19「この授業により、『自分を誇りを持つ力』が向上した」（昨年度 3.96 から 4.06）及び Q22「この授業により、『課題を解決する力』が向上した」（同 4.19 から 4.26）をはじめとする Q18 以降の項目で比較的大きな上昇がみられており、具体的な部分だけではなく、全体としても向上があったといえる。

②今後の課題

全体平均との比較において本学科の数値が下回る項目のうち、Q3「この授業はシラバス（変更したシラバスも含む）に沿っていた」、Q6「教材（配布資料、動画、音声、パワポなど）が理解に役立った」は、昨年度も全体平均より低かった。Q3についてはシラバスを吟味せずに必修として履修している学生が多いことが一因と推測できるが、授業内で15回中の進行状況を確認する等、学生が学修状況に対して見通しが立てられるような工夫が必要と考える。また、教材に関しては、本学科の特性により多種多様な教材が使用されているため、教員間の情報共有が有効であろう。

なお、本学科の回収率は、全体平均が58%、他学科の多くが60%前後である中で、昨年度に続いて80%と安定して高い。8割の学生によるものという評価の信頼性だけではなく、8割の学生が学修を振り返る機会を得ている意義は高いといえる。今後は、2023年度より導入された学修成果の可視化システムとあわせて、4年間の個々の蓄積について、面談等で学生と教員が振り返る機会をつくっていくことも重要である。

5) 英語コミュニケーション学科の専門科目の課題（学科長 星野文子）

①授業の総合満足度及びそれにかかわる要因

今年度も昨年度に続き、総合的な満足度は全学科中で1位となったことは、とても喜ばしい。本学科の良さについて在校生に聞き取りをすると、教員が学生にきちんと向き合っていることを取り上げてくれるが、Q8「教員へ質問できる環境」、Q9「教員の質問への対応」などの数値が高いのは、学生たちへの教員の姿勢を、学生たちが認めてくれている証拠である。

また、Q3「授業内容は知的刺激に富む」という問いへの評価が高いことは、学ぶ面白さを体得したことの裏付けではないかと思われる。さらには、学生たち自身が、この授業により、Q19～Q23のそれぞれの力が向上したという問いへも高い評価をつけている。このように知的好奇心を実感することや、自らが持つ力の向上に関する自覚は、卒業後に、社会に出ても役立つ力である。最後に、在校生たちが学びに関する満足度が高いことは、必ず、広報にも前向きにつながると考えるため、今後も、在学生の学びを一番に考える学科として、学生たちと共に学んでいきたいと考える。

②今後の課題

昨年度同様に、アンケートの回収率を80%以上に引き上げることである。良い授業を受けた、あるいは、授業の運営方法に前向きに思う学生がアンケートに答えてくれる傾向については、前学科長も指摘している通りである。また、この授業評価アンケートは学期末に開催するため、常日頃から学生たちの声に敏感になり、よい授業を展開するために、学期中のFeedbackシステムを持っていることが、授業の向上につながるように思われる。学科内でも優れた取り組みは随時共有して、学科全体でよい授業運営に尽力していきたい。

6) 国際学科の専門科目の課題（学科長 金丸裕志）

①授業の総合満足度及びそれにかかわる要因

まず特筆すべきは、すべての質問項目で全学科の平均を上回っている点であろう。そのうえで全学平均よりもとくに高かった項目として、Q13の0.25、Q21の0.22、Q19・Q16で0.19、Q5・Q22で0.18、Q15・Q7・Q12で0.17、Q9・Q20で0.16があげられる。これに対し、比較的

低かった項目として、Q4 および Q3 の 0.09、Q24 の 0.08、Q1 の 0.07 が全学科の平均との差で 0.1 ポイントを下回る。ただし最も低い項目でも全学平均より 0.07 高い。このようにすべての質問項目で全学科の平均を上回ったことは素直に評価したい。

しかしそのなかでも課題を見いだすとすれば、どのような項目で比較的低い評価に留まったかという点であろう。比較的低評価の項目には、「Q4 新しい知識・技術を学べた」「Q3 知的刺激に富んでいた」「Q24 総合的な満足度」「Q1 自身の大学での学びの目標達成に近づいた」というように、総合的・抽象的な評価に関する項目が多い。これに対して比較的高評価の項目には「Q13 積極的に意見や質問をした」「Q16 レポートや試験に積極的に取り組んだ」「Q5 教員は学生の反応や理解度を考慮しながら授業を進めた」「Q15 予習・復習などを含め自己学習の時間を確保した」といった具体的な内容のものが多く含まれている。なかでも「Q24 総合的な満足度」が相対的に低い評価となっている点は今後の課題として注目すべき点であろう。ただし、高評価項目のなかに「Q7 教員の説明がわかりやすかった」「Q12 教員の熱意を感じた」「Q9 教員の質問への対応が適切だった」という教員の教え方についての項目がいくつも含まれていることは心強い結果として肯定的に捉えたい。

前年度までと比べると、こちらも顕著な違いが表れている。まず 2022 年度では「Q13 自分自身もこの授業で積極的に意見や質問をした」のみが全学平均を 0.22 上回る一方で、Q24、Q17、Q10、Q2、Q3、Q4、Q18、Q23、Q14 が 0.1 未満となりほぼ平均値にとどまる。また 2021 年度の結果では、Q9、Q8、Q13 を除いてすべて 0.1 未満であり、Q4、Q15、Q18、Q23 では全学科の平均を下回っていた。つまりこの 3 年間で、他学科との比較において授業評価の内容が大きく向上していることがわかる。こちらも肯定的に捉え、今後も自信を持って学科教員が授業を進めていくようにサポートしたい。

②今後の課題

上記のように、昨年度の本学科の授業評価は全体的に良好な成績であったといえる。またこれまで 3 年間の推移でも大きく向上してきている点は肯定的に捉えたい。ただし総合的な満足度の項目を含め、総合的・抽象的な項目で相対的に評価が低い点は今後の課題として捉え、改善を心がける必要がある。国際学科では今年度、新たに 2 名の新任教員をお迎えした。昨年度の授業評価では教員のスキルに関する内容で高い評価を得た。今後、新任教員も迎えて、この点がどのように推移するかにも注目し、教員の授業スキルの高さを十分に生かせるように支援していきたい。

7) 服飾造形学科の専門科目の課題 (学科長 森本美紀)

①授業の総合満足度及びそれにかかわる要因

2023 年度の学科の総合的満足度は 4.48 と大学全体の平均 4.45 をわずかに上回った結果となり、この状況は 2021 年度から続いている。その要因として考えられるのは、大学全体の平均より評価の高い、Q3「この授業の内容は知的刺激に富んでいた」、Q4「この授業で新しい知識・技術を学べた」Q8「教員へ質問できる時間や環境があった」、Q9「教員の質問への対応が適切だった」、Q12「この授業から教員の熱意を感じた」、Q23「この授業により、『社会に役立つ専門力』が向上した」が挙げられる。Q8、Q9、Q12 が高評価であったことから、教員の学生への対応や指導が十分であったと言える。また、Q3、Q4、Q23 が高評価であったことから、学生の積極的な取り組みと専門性の高い教員によるきめ細かい対応や実務経験が豊富な教員の指導により、学生

自身が社会に貢献できる専門技術の習得を実感できていることがわかる。

②今後の課題

一方で、Q20「この授業により、『基礎学力と文章力』が向上した」、Q21「この授業により、『人を理解し自分を表現する力』が向上した」については、3年連続で大学全体の平均を下回っている。本学科の専門科目においては、基礎学力と文章力、自己表現力についての学修効果を実感し難いと考えられるが、特に、低学年に設けられた専門科目においては学生が学修効果を実感できる指導をしていく必要がある。

また、2023年度になりはじめて、Q13「自分自身もこの授業で積極的に意見や質問をした」、Q14「この授業はよく出席・参加した」、Q15「この授業では予習・復習などを含め自己学習の時間を確保した」、Q16「この授業のレポートや試験に積極的に取り組んだ」、Q17「この授業から新たな興味や関心が生まれ、さらに勉強したくなった」が、大学全体の平均を若干下回った。学生の学修意欲を引き出し、課題やレポートに積極的に取り組むことができるよう、一人ひとりの特性や能力に適したきめ細かく丁寧な指導をしていくことが今後の課題である。

授業評価アンケートの回収率について、2021年度 47%、2022年度 58%、2023年度 55%と大学全体の平均である 49%、65%、58%を継続的に下回っている。回収率が高い学科のアンケート実施方法などを参考にし、回収率の向上を目指すことも本学科の課題である。

8) 健康栄養学科の専門科目の課題 (学科長 杉浦令子)

①授業の総合満足度及びそれにかかわる要因

2023年度健康栄養学科専門科目の総合的満足度の平均値は 4.39 であり、全体平均値である 4.45 に比べて低値であった。設問別にみると、Q18「この授業により、自身の大学での学びの目標達成に近づいた」、Q23「この授業により、『社会に役立つ専門力』が向上した」については、全体平均値と比較して高値であった。しかし、Q17「この授業から新たな興味や関心が生まれ、さらに勉強したくなった」、Q19「この授業により、『自分を知り誇りを持つ力』が向上した」、Q20「この授業により、『基礎学力と文章力』が向上した」、Q21「この授業により、『人を理解し自分を表現する力』が向上した」、Q22「この授業により、『課題を解決する力』が向上した」については全体平均値を下回った。さらに、回収率も前年度の 81% に比べ 66% と低くなったことも影響し、総合的満足度が全体平均値に及ばなかったと考える。

一方、学科内で 2022 年度と比較したところ、2023 年度で上昇した設問は、Q13「自分自身もこの授業で積極的に意見や質問をした」、Q19「この授業により、『自分を知り誇りを持つ力』が向上した」、Q20「この授業により、『基礎学力と文章力』が向上した」、Q21「この授業により、『人を理解し自分を表現する力』が向上した」の 4 項目であった。2023 年度は専門科目のすべての授業が対面授業となり (92.8%→99.7%)、また健康栄養学科は実験・実習でのグループワークも多く、教育目標としている他者との協同やコミュニケーション能力向上により、昨年度に比べ上記の設問のポイントが上昇したと考えられる。

②今後の課題

授業評価を教育により反映させるためには、まずは授業評価アンケートの回収率を高める必要があると考えている。各授業でアンケート回答時間を確保しているが、個々が回答したかどうかの判別は難しい。回収率が高い学科の工夫を参考にしたい。そして、全体平均値に比べて大きく下回った、Q5「教員は学生の反応や理解度を考慮しながら授業を進めた」、Q6「教材が理

解に役立った」、Q7「教員の説明がわかりやすかった」、Q8「教員へ質問できる時間や環境があった」、Q9「教員の質問への対応が適切だった」については、教員の熱意や工夫が学生に伝わるようにしたい。一方、昨年度の課題であった、Q21「この授業により、『人を理解し自分を表現する力』が向上した」の評価については、①で述べたようにポイントが上昇した。健康栄養学科では、管理栄養士に必要な高度な知識と技術、コミュニケーション能力を身につけることを教育目標としている。学生自身が、他者と協力して学びを深めることができ、自身でその向上を認識・評価できていたと考える。しかし、全体平均値より大きく下回っていることから、次年度への継続課題とし、学科で共有して工夫を検討し、総合満足度向上を目指したい。

9) 家政福祉学科の専門科目の課題（学科長 丸谷充子）

①授業の総合満足度及びそれにかかわる要因

これまで当学科の授業評価は総じて高く、大学全体の平均を下回る評価項目が少ない状況であるが、2023 年度もこれまでと同様の結果であった。Q23「この授業により、『社会に役立つ専門力』が向上した」については、昨年度と同様に大学全体の中で最も高い評価であった。学生が当学科の生活を基盤とした種々の学びを社会に役立つ専門性の獲得につながると捉えている結果であると考ええる。英語コミュニケーション学科、国際学科に次いで評価が高かったのが、Q6「教材（配布資料、動画、音声、パワポなど）が理解に役立った」、Q16「この授業のレポートや試験に積極的に取り組んだ」、Q17「この授業から新たな興味や関心が生まれ、さらに勉強したくなった」、Q19「この授業により、『自分を知り誇りを持つ力』が向上した」、Q20「この授業により、『基礎学力と文章力』が向上した」、Q22「この授業により、『課題を解決する力』が向上した」の 5 項目であった。学生が各授業に積極的に取り組むことで興味関心が拡がり、学びの成果を得られていると実感していることが窺える。

②今後の課題

わずかであるが全体平均を下回った項目が Q8「教員へ質問できる時間や環境があった」と、Q13「自分自身もこの授業で積極的に意見や質問をした」の 2 項目であった。これらの項目については、教員側の働きかけで学生の発言や質問のしやすさの改善を図ることができると考えられる。これらの結果を学科で共有した上で教員の働きかけの工夫を検討し、学生が発言や質問しやすい環境を作り、学生の満足度の向上を図りたい。

最後に、全体平均よりは上回っているとはいえ、回収率が 59%である点については改善できると考えられる。回収率を上げることで学生全体の声に耳を傾け、さらなる総合満足度の向上を目指したい。

10) 看護学科の専門科目の課題（学科長 大堀昇）

①授業の総合満足度及びそれにかかわる要因

看護学科の総合満足度は、Q14「出席・参加」を除き 2021 年度、2022 年度と年々上昇しており、2023 年度はさらに上回った。他学科との比較ではまだまだ低い項目はあるものの、多くの項目が改善傾向にある。得点 4.35 以上と高かった項目は、Q2、Q3、Q4、Q10、Q12、Q14、Q16、Q24 の 8 項目あり、項目数も年々増えてきている。

高得点だった項目の内容を見てみると、Q2「シラバスに沿っていた」、Q3「知的刺激に富んでいた」、Q4「新しい知識・技術を学べた」、Q10「出席確認方法が適切」、Q12「教員の熱意を感じ

た」、Q14「出席・参加」、Q16「積極的に取り組んだ」、Q24「総合的に満足」であった。要因として、2023年度からは全面的に対面授業となり、直接学生と教員とのやり取りのある授業形態だったことから、知的好奇心を直に刺激され、出席状況や課題等への取り組みが向上し総合的満足につながったものとする。教授する側も対面授業とともに manaba course や CLEVAS、その他の IT 教材を上手に活用したり、シミュレーションを取り入れたりと授業方法を改善した結果とする。

全体平均点より上回った項目は、Q13「積極的に意見や質問をした」、Q15「自己学習の時間を確保した」、Q17「さらに勉強したくなった」、Q18「学びの目標達成に近づいた」、Q19「自分を誇りを持つ力が向上した」、Q21「人を理解し自分を表現する力が向上した」、Q22「課題を解決する力が向上した」、Q23「社会に役立つ専門力が向上した」であった。これらの項目が意味するものは、本学科のディプロマ・ポリシーにある「倫理観」「自律性」「専門性」「地域・社会貢献性」「多様性の理解」「継続する力」の内容であり、目指す教育が実現されつつあるものとする。

他学科平均点との比較では、Q2～12、Q14、Q16、Q18、Q23、Q24 の 16 項目の得点が低かった。多くの項目が低かった要因としては、クラスサイズが大きいことや学修すべき内容が多いことから、授業が教員から学生への一方的な知識伝達になりやすく、授業中に学生の理解を確認したり質問を受けたりといったコミュニケーションをとることが少ないこと、また演習が多く課題が多いため学生自身にゆとりがないことも挙げられる。

②今後の課題

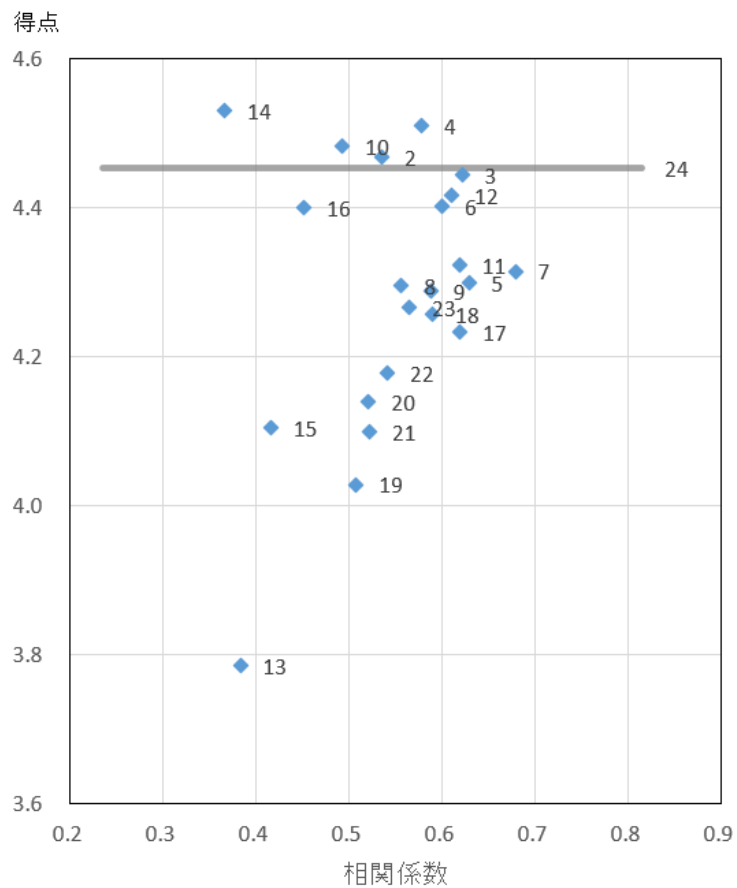
年々得点が上昇しているものの、多くの項目で全体平均点や他学科平均点と比較し低かった。クラスサイズが大きいことや専門知識に関する学修内容の多さから一方的な授業方法となりやすいことが要因と考えられる。今後の課題として、教員と学生とのコミュニケーションを図り、双方向の授業展開ができるよう工夫していく必要がある。また授業への満足度を上げるためには、学生の達成感や充実感が味わえるよう工夫することも大切であるとする。そのために、事前学習内容を検討するなど学習レディネスを高める方略やさらにアクティブラーニングを取り入れるなど、学生の興味・関心を促す取り組みをしていきたい。

以上、共通総合科目・専門科目別に、①授業の総合満足度及びそれにかかわる要因、②今後の課題をみてきた。2023年度は、対面授業が共通科目を含めた全体の 88%、また、9 学科中 7 学科で 99%の実施率となった。満足度は全体的に上昇しているが、この要因としては、対面授業が増えたことで教員と学生との相互交流が可能になったこと、また、COVID-19 流行下において培った教育方法の工夫や manaba や CLEVAS といったツールの活用が功を奏していることが挙げられる。

この結果から、授業満足度の高い学科や教員などの取り組みを共有したり意見交換するなど、学科内あるいは学科を越えて協力（共有）し、全学的な授業満足度を高めていく必要がある。今後の課題としては調査項目の検討である。現行の調査項目は、経年変化をみるために 2025 年度実施分までは継続することになっている。しかし、授業満足度には、クラスサイズや学科の特殊性（教授内容やオムニバスの有無、演習・実習の有無他）なども影響するため、今後は、各学科の教授内容をより評価しやすい項目の整理も含めて検討する必要がある。また、カリキュラム変更が行われる場合、科目の配置（学年、前後期）や、旧カリキュラムと新カリキュラムとの比較などにも役立てることができると、今後の参考にしたい。

最後に、授業内で回答時間を設けているにもかかわらず、回収率が低下してしまったことへの対策を講じ、より精度の高い結果が得られるようにする必要がある。

図3 授業の総合満足度(Q24)と他項目との相関
※プロット脇の番号が質問番号を示す



5. 資料

参考：2023 年度授業評価アンケート設問

※Q2～Q24 の⑤～①は評価点数となります。⑥は点数に含まれません。

		強く そう思う	そう 思う	どちら でもない	そう 思わない	全く そう 思わない	該当 しない ・ 答え たくない
Q1	この科目の授業開講方法を選択してください ①対面授業 ②メディア授業（遠隔オンデマンド）	-					
Q2	この授業はシラバス（変更したシラバスも含む）に沿っていた	⑤	④	③	②	①	⑥
Q3	この授業の内容は知的刺激に富んでいた	⑤	④	③	②	①	⑥
Q4	この授業で新しい知識・技術を学べた	⑤	④	③	②	①	⑥
Q5	教員は学生の反応や理解度を考慮しながら授業を進めた	⑤	④	③	②	①	⑥
Q6	教材（配布資料、動画、音声、パワポなど）が理解に役立った	⑤	④	③	②	①	⑥
Q7	教員の説明がわかりやすかった	⑤	④	③	②	①	⑥
Q8	教員へ質問できる時間や環境があった	⑤	④	③	②	①	⑥
Q9	教員の質問への対応が適切だった	⑤	④	③	②	①	⑥
Q10	出席確認の方法が適切であった	⑤	④	③	②	①	⑥
Q11	この授業の運営時間、学習量が適切だった	⑤	④	③	②	①	⑥
Q12	この授業から教員の熱意を感じた	⑤	④	③	②	①	⑥
Q13	自分自身もこの授業で積極的に意見や質問をした	⑤	④	③	②	①	⑥
Q14	この授業はよく出席・参加した	⑤	④	③	②	①	⑥
Q15	この授業では予習・復習などを含め自己学習の時間を確保した	⑤	④	③	②	①	⑥
Q16	この授業のレポートや試験に積極的に取り組んだ	⑤	④	③	②	①	⑥
Q17	この授業から新たな興味や関心が生まれ、さらに勉強したくなった	⑤	④	③	②	①	⑥
Q18	この授業により、自身の大学での学びの目標達成に近づいた	⑤	④	③	②	①	⑥
Q19	この授業により、「自分を誇りを持つ力」が向上した	⑤	④	③	②	①	⑥
Q20	この授業により、「基礎学力と文章力」が向上した	⑤	④	③	②	①	⑥
Q21	この授業により、「人を理解し自分を表現する力」が向上した	⑤	④	③	②	①	⑥
Q22	この授業により、「課題を解決する力」が向上した	⑤	④	③	②	①	⑥
Q23	この授業により、「社会に役立つ専門力」が向上した	⑤	④	③	②	①	⑥
Q24	あなたのこの授業に対する総合的な満足度を示してください ⑤大変満足 ④やや満足 ③どちらでもない ②やや不満 ①不満 ⑥該当しない・答えたくない	⑤	④	③	②	①	⑥
Q25	この授業についての意見・感想・希望等あなたが思っていることを できるだけ具体的に何でも入力してください	自由記述					

※manaba course での選択肢は仕様上、1「強くそう思う」～5「全くそう思わない」、6「答えたくない」としています。

2023(令和 5)年度 授業評価アンケート報告書

2024(令和 6)年 9 月

編集 和洋女子大学 大学・大学院評議会

担当 多賀昌樹 白鳥孝子

発行 和洋女子大学

〒272-8533 千葉県市川市国府台 2-3-1

TEL 047-371-1111